



夏はすぐそこ

校長 吉田 伸 吾

梅雨時に気になることとは、雨が降って校庭や中庭が使えないために、子供たちがあり余るエネルギーを発散させることができず、そのため室内で怪我をすることはないかと心配になることです。各担任の指導もあり、いまのところ大怪我の話は私の耳に入ってきていないのでホッと一安心しているところです。

例年であれば、ここ関東地方は7月20日終業式の頃に梅雨明けを迎えます。雨続きのうっとうしい季節が終わると、ギラギラの太陽が照りつける「夏」がやってくるのです。

よく聞かれる質問に「あなたは夏と冬のどっちが好き？」というのがあります。私は迷わず「夏！」と即答します。そこで「なぜ？」と聞かれると、「だって冬は風邪引くし、一方の夏は軽装で楽だし、暑い中でダラダラするのが好きだから」と答えています。(大人相手であれば「ビールがおいしいから」って答える場合もあります。)

しかし、最近になって思い出すのは、子供の頃の夏のことです。私は生まれも育ちもここ埼玉県なのですが、就学前から夏になると母方の祖母と一緒に、祖母の生まれた田舎である神奈川県大磯町に行き、祖母が昔住んでいた部屋を借りて一月ほどそこに滞在していました。(このように書くと「別荘？」のようですが、実は10畳一間。)そこで、ある日は町民プールへ泳ぎに、またある日は大磯海岸へ泳ぎに、さらに親戚の家が釣り船を営んでいた関係で、時にはその船に(タダで)乗せてもらい、相模湾へ沖釣りにと思う存分に夏を満喫していました。泳ぎや釣りも思い出すのですが、それよりも印象深く、思い出す記憶も鮮明なのが相模湾に浮かぶ巨大な夏の積乱雲(入道雲)です。雲は白以上に真っ白で、その上にある空は青というよりは藍色のような濃い青でした。さらにじっと見ていると、雲の上端がにょきにょきと育っていく様子が分かるのです。子供心にワクワクやら、ドキドキやら、ジーンとやら感じた強烈な記憶があります。今でも沖釣りは大好きで、時間があれば一人で相模湾の乗合船に乗せてもらって晩のおかずを釣りにいくのですが、子供の頃に見た積乱雲には出会ったことがありません。

今思えば、自分が夏好きである一番の理由は、この子供の頃に大磯で見て感動した「海と積乱雲と青空」の風景にあるのかなということです。子供の頃に経験をして心に強く残っている「風景」は、なぜか歳をとればとるほど強烈に思い出されます。そして、もしかすると当時見た本物の「風景」以上に、心の中ではその印象が増幅されていき、一生忘れ得ぬ「絵」に昇華されていくのかも知れません。

間もなく596人の子供たちが楽しみにしている夏休みがやってきます。6歳には6歳の、12歳には12歳の夏があって、そしてそれはその子にとって生涯一度きりの夏なのです。

この夏に子供たちにはどのような経験、体験が待っているのでしょうか。それは大人が仕組むことも可能でしょうが、当時の吉田さんちの両親(うちの父母のことです)は、今息子がオジサンになってそんなことを考えているなんて当時は思いもよらなかったことでしょう。つまり、大人の意志とは別のところで子供はその瑞々しい感性で何かを感じ取るんですね。どの子にとってもこの夏が生涯忘れられないような素敵な「夏」になることを願っています。

最後にもう一話。当時、ある日の夕方、私は「はとこ」たちとその母親(私には従兄弟伯母、ここでは「おば」とします)と一緒に大磯海岸に行き、浜辺で遊んでいました。その時です。突然の大波が子供たち全員を飲み込みました。引き波に流される中で、私はとっさに「はとこ」の足首をつかみ、さらにその「はとこ」は「おば」につかまったということがありました。私はそのことを断片的に覚えているのですが、もっとビックリしたのが、その約30年後、私の母の葬儀での「おば」の話でした。「あの時、ちっちゃな伸ちゃん(私のことです)が大波にさらわれて、私とてもパニックになったのよ。でもたまたま娘の足に伸ちゃんがかまってくれていて本当にホッとしたの。」ってそれ、私その時に死にかけたってことですか！夏の「楽しみ」と「危険」は背中合わせでやってきます。くれぐれもご注意を。



吉田撮影 夏の雲